

日蓮大聖人御書全集

にちによごぜんごへんじ

日女御前御返事

ぞくるいほんとうたいい こと

（嘱累品等大意の事）

新版
2090
〜
2097

にちによごぜんごへんじ ぞくるいほんとうたいい こと

日女御前御返事（囑累品等大意の事）

こうあんがんねん

がつ

にち

さい

にちによ

弘安元年（'78） 6月25日

57歳

日女

おんふせしちかんもん

おく

た

お

御布施七貫文、送り給ひ畢わんぬ。

ぞくるいほん

みこころ

ほとけこくう

た

たま

しひやくまんおくな ゆた

囑累品の御心は、仏虚空に立ち給いて、四百万億那由他

せかい

武蔵野

芒

ふじさん

き

の世界に、むさしののすすきのごとく、富士山の木のごと

簇

簇

膝

詰

寄

こうべ

ち

付

み

曲

く、ぞくぞくとひざをつめよせて、頭を地につけ、身をま

たなごころ

合

汗

なが

露

繁

じょうぎよう

げ、掌をあわせ、あせを流し、つゆしげくおわせし上行

ぼさつとう

もんじゅとう

だいぼんてんのう

たいしやく

にちがつ

してんのう

しゅうおう

菩薩等・文殊等・大梵天王・帝釈・日月・四天王・竜王・

じゅうらせつによとう

ほけきよう

讓

みたび

いただき

十羅刹女等に法華経をゆずらんがために、三度まで頂を

摩

たも

たと

ひも

いっし

いただき

髪

撫

なでさせ給う。

譬えは、悲母の一子が頂のかみをなずる

とき

じようぎようないしにちがつとう

かたじけな

おお

こうむ

がごとし。その時に、上行乃至日月等、

忝き仰せを蒙

ほけきよう

まつだい

ぐつう

誓

たま

つて、法華経を末代に弘通せんとちかい給いしなり。

やくおうほん

もう

むかし

きけんぼさつ

もう

ぼさつ

にちがつじようみよう

薬王品と申すは、昔、喜見菩薩と申せし菩薩、日月浄明

とくぶつ

ほけきよう

なら

たま

し

おん

もう

ほけきよう

徳仏に法華経を習わせ給いて、その師の恩と申し、法華経の

尊

もう

感

堪

よろず

ちようほう

つ

とうとさと申し、かんにたえかねて万の重宝を尽くさせ

たま

こころ 行

み

あぶら

塗

給いしかども、なお心ゆかずして、身に油をぬりて

せんにひやくさい

あいだ

とうじ

あぶら

灯

心

い

焚

千二百歳の間、当時の油にとうしみを入れてたくがごと

み

ほとけ

くよう

のち

しちまんにせんさい

あいだ

臂

く、身をたいて仏を供養し、後に七万二千歳が間ひじを

灯

焚

尽

ほけきよう

ごくようそうら

ともしびとしてたきつくし、法華経を御供養候いき。

いま

ほけきよう

のち

ごひやくさい

によにんくよう

されば、今、法華経を後の五百歳の女人供養せば、その

くどく

いちぶん

残

譲

たと

ちようじゃ

いっし

功德を一分ものこさずゆずるべし。譬えば、長者の一子に

いっさい

ざいほう

一切の財宝をゆずるがごとし。

みようおんぼん

もう

とうほう

じようけしゆくおうちぶつ

くに

みようおんぼさつ

妙音品と申すは、東方の浄華宿王智仏の国に妙音菩薩

もう

ぼさつ

むかし

うんらいおんのうぶつ

みよ

みようしようごんのう

と申せし菩薩あり。昔の雲雷音王仏の御代に妙莊嚴王の

きさき

じようとくぶにん

むかしほけきよう

くよう

いまみようおんぼさつ

后・浄徳夫人なり。昔法華経を供養して、今妙音菩薩と

なれり。

しやかによらい

しやばせかい

ほけきよう

と

たも

参

釈迦如来の娑婆世界にして法華経を説き給うに、まいり

やくそくもう

まつだい

によにん

ほけきよう

たも

たも

守

て、約束申して、末代の女人の法華經を持ち給うをまもる

うんぬん

べしと云々。

かんのんぼん

もう

ふもんぼん

な

はじ

かんぜおんぼさつ

観音品と申すは、また普門品と名づく。始めは觀世音菩薩

たも

たてまつ

ひと

くどく

と

そうろう

かんのんぼん

な

を持ち奉る人の功德を説いて候。これを觀音品と名づ

のち

かんのん

たも

たま

ほけきよう

たも

ひと

くどく

説

く。後には觀音の持ち給える法華經を持つ人の功德をとけ

ふもんぼん

な

り。これを普門品と名づく。

だらにほん

もう

にしよう

にてん

じゅうらせつによ

ほけきよう

ぎようじや

陀羅尼品と申すは、二聖・二天・十羅刹女の法華經の行者

しゅご

よう

と

にしよう

もう

やくおう

ゆせ

を守護すべき様を説けり。二聖と申すは藥王と勇施となり。

にてん

もう

びしゃもん

じこくてん

じゅうらせつによ

もう

二天と申すは毘沙門と持国天となり。十羅刹女と申すは

十人の大鬼神女、四天下の一切の鬼神の母なり。また

じゆうらせつによ

はは

きしもじん

き

習

ひと

十羅刹女の母あり。鬼子母神これなり。鬼のならいとして人

じき

ひと

さんじゅうろくもつ

ふん

によう

つばき

にく

を食す。人に三十六物あり。いわゆる糞と尿と唾と肉と

ち

かわ

ほね

ごぞう

ろつぷ

かみ

け

き

いのちとう

血と皮と骨と五蔵と六腑と髪と毛と氣と命等なり。しかる

げほん

きじん

ふんとう

じき

ちゅうぼん

きじん

ほねとう

じき

に、下品の鬼神は糞等を食し、中品の鬼神は骨等を食す。

じようほん

きじん

しやうけ

じき

じゆうらせつによ

じようほん

きじん

上品の鬼神は精気を食す。この十羅刹女は、上品の鬼神と

しやうけ

じき

えきびやう

だいきじん

して精気を食す。疫病の大鬼神なり。

きじん

ふた

いち

ぜんき

に

あつき

ぜんき

鬼神に二つあり。一には善鬼、二には悪鬼なり。善鬼は

ほけきやう

あだ

じき

あつき

ほけきやう

ぎやうじゃ

じき

いま

にほん

法華経の怨を食す。悪鬼は法華経の行者を食す。今、日本

こく　こぞ　ことし　だいえきびよう　なん　こころ得　こた

国の去年・今年の大疫病は何とか心うべき。これを答う

よう　いち　ぜんき　ほんのう　たいしやく　にちがつ　してん　ゆる

べき様は、一には善鬼なり。梵王・帝釈・日月・四天の許さ

ほけきよう　あだ　じき　に　あつき　だいろくてん　まおう

れありて、法華経の怨を食す。二には悪鬼が第六天の魔王の

勸　ほけきよう　しゆぎよう　ひと　じき

すすめによりて法華経を修行する人を食す。

ぜんき　ほけきよう　あだ　く　かんぺい　ちようてき　ばつ

善鬼が法華経の怨を食らうことは、官兵の朝敵を罰する

あつき　ほけきよう　ぎようじゃ　く　ごうとう　よう

がごとし。悪鬼が法華経の行者を食らうは、強盗・夜討ち

とう　かんぺい　ころ

等が官兵を殺すがごとし。

れい　にほんこく　ぶつぼう　わた　とき　ぶつぼう　かたき

例せば、日本国に仏法の渡つてありし時、仏法の敵たり

もののべのおおむらしもりやとう　えきびよう　病　そがのすくねうまことう

し物部大連守屋等も疫病をやみき。蘇我宿禰馬子等もや

みき。欽明・敏達・用明の三代の国王は、心には仏法・釈迦
によりきんめい びだつ ようめい さんだい こくおう こころ ぶつぼう しやか
にしん たま

如来を信じまいらせ給いてありしかども、外げには国の礼に
てんしょうだいじん くまのさんとう あお たま

まかせて天照太神・熊野山等を仰ぎまいらせさせ給いしか
ほつけ ほう しん 薄 かみ しん 厚 つよ

ども、仏と法との信はうすく神の信はあつかりしかば、強
引 さんだい こくおう えきびようほうそう ほうぎよ たま

きにひかれて三代の国王、疫病瘡瘡にして崩御ならせ給い
き。

これをもつて上の二鬼をも、今の代の世間の人々の疫病
かみ にき いま よ せけん ひとびと えきびよう
にちれん かた 病 死 こころ 得

をも、日蓮が方のやみしぬをも心うべし。されば、身を
しん ひとびと 病 み 捨

てて信ぜん人々はやまぬへんもあるべし。またやむとも
しん ひとびと 病

助 辺

だいあつき

あ

いのち

うば

たすかるへんもあるべし。また大悪鬼に値いなば命を奪わ

ひと

れい

はたけやましげただ

にほんだいいち

だいき

る人もあるべし。例せば、畠山重忠は日本第一の大力の

たいしよう

たぜい

つい

滅

大将なりしかども、多勢には終にほろびぬ。

にほんこく

いつさい

しんごんし

あくりよう

また、日本国の一切の真言師の悪霊となれると、ならび

ぜんしゆう

ねんぶつしやとう

にちれん

怨

こくちゆう

い

に禅宗・念佛者等が、日蓮をあだまんがために国中に入り

みだ

ぼんしやく

にちがつ

じゆうらせつ

けんぞく

にほんこく

らんにゆう

乱れたり。また梵釈・日月・十羅刹の眷属、日本国に乱入

りようほうたが

せ 取

励

せり。両方互いに責めとらんとはげむなり。しかるに、

じゆうらせつによ

そう

ほけきよう

ぎようじや

しゆゑ

ちか

たま

十羅刹女は、総じて法華經の行者を守護すべしと誓わせ給

そうら

いつさい

ほけきよう

たも

ひとびと

しゆゑ

たも

いて候えば、一切の法華經を持つ人々をば守護せさせ給う

おも　　そうろう

ほけきよう

たも

ひとびと

だいにちきよう

らんと思ひ候に、法華經を持つ人々も、あるいは「大日經

勝

もう

しんごんし

ほけきよう

どくじゆ

そうろう

はまされり」など申して真言師が法華經を讀誦し候は、

謗

そうろう

よ

しゆうじゆう

かえりてそしるにて候なり。また余の宗々もこれをも

お

はか

つて押し計るべし。

ほけきよう

きよう

たも

ひとびと

ほけきよう

ぎようじや

また、法華經をば經のごとく持つ人々も、法華經の行者

とん

じん

ち

せけん

を、あるいは貪・瞋・癡により、あるいは世間のことによ

品

々

振

舞

にく

ひと

り、あるいはしなじなのふるまいによつて憎む人あり。こ

ほけきよう

しん

しん

くどく

ばち

れは法華經を信ずれども信ずる功德なし。かえりて罰を

被

かぼるなり。

例れいせば、父ふ母ぼなんどには謀反等むほんとうより外ほかは子息等しそくとうの身みとし

てこれに背けば不孝そむなり。父ふが我わがいとおしきめをとり、母はは

が我わがいとおしきおとこを奪うばうとも、子この身みとして一分も

違たがわば、現世げんせには天てんに捨てられ、後生ごしようには必ず阿鼻地獄あびじごくに

墮おつる業ごうなり。いかにいわんや、父母ふぼにまされる賢王けんおうに背か

んをや。いかにいわんや、父母ふぼ・国王こくおうに百千万億倍ひやくせんまんおくばいまされ

る世間の師せけんをや。いかにいわんや出世間の師しゅつせけんをや。いかに

いわんや法華經ほけきょうの御師おんしをや。

黄こう河がは千年せんねんに一度いちどすむといえり。聖人しょうにんは千年せんねんに一度いちど出でず

るなり。ほとけ　むりようこう　いちどしゆつせ　たも　かれ　あ 仏は無量劫に一度出世し給う。彼には値うといえ

ども、法華經には値いがたし。ほけきよう　あ たとい法華經に値い奉る

とも、末代の凡夫、法華經の行者には値いがたし。まつだい　ぼんぷ　ほけきよう　ぎようじや　あ

いかんぞなれば、末代の法華經の行者は、法華經を説か

ざる華嚴・阿含・方等・般若・大日經等の千二百余尊より

も、末代に法華經を説く行者は勝れて候なるを、妙樂

大師釈して云わく「供養することあらん者は福十号に過

ぎ、もし悩乱する者は頭七分に破る」云々。のうらん　もの　こうべしちぶん　わ　うんぬん

今、日本国の者、去年・今年の疫病と去ぬる正嘉の疫病

にんのうはじ

くうじゆうよだい

なら

えきびよう

しようにん

とは、人王始まつて九十余代に並びなき疫病なり。聖人の

くに

怨

故

み

しし

ほ

いぬ

はらわた

国にあるをあだむゆえと見えたり。師子を吼うる犬は腸

き

にちがつ

呑

しゆら

こうべ

わ

そうろう

切れ、日月をのむ修羅は頭の破れ候なるは、これなり。

にほんこく

いつさいしゆじよう

さんぶん

に

病

はんぶん

日本国の一切衆生すでに三分が二はやみぬ。また半分は

し

いまいちぶん

み

病

こころ

こうべ

死しぬ。今一分は身はやまざれども、心はやみぬ。また頭

けん

みよう

わ

ばち

よつ

そうばち

べつばち

も、頭にも冥にも破れぬらん。罰に四つあり。総罰・別罰・

みようばち

けんばち

しようにん

怨

そうばちいつこく

冥罰・頭罰なり。聖人をあだめば、総罰一国にわたる。

してんげ

ろくよく

しぜん

けんじん

また四天下、また六欲・四禪にわたる。賢人をあだめば、

てきじんとう

いま

にほんこく

えきびよう

そうばち

さだ

ただ敵人等なり。今、日本国の疫病は総罰なり。定めて

しょうにん くに

聖人の国にあるをあだむか。山は玉をいだけば草木かれず。

やま たま 抱 そうもく 枯

くに しょうにん

くに 破

やま そうもく 枯

たま

国に聖人あればその国やぶれず。山の草木のかれぬは玉の

ゆえ

ぐしや

知

くに

破

しょうにん

ゆえ

ある故とも愚者はしらず。国のやぶるるは聖人をあだむ故

ぐにん

わきま

とも愚人は弁えざるか。

にちがつ

ひかり

もうもく

もち

たとい日月の光ありとも、盲目のために用いることなし。

こえ

みみ 癡

よう

たとい声ありとも、耳しいのためににの用かあるべき。

にほんこく

いつさいしゅじよう

もうもく

みみ

いつさい

日本国の一切衆生は盲目と耳しいのごとし。この一切の

まなこ

みみ

抉

いつさい

まなこ

開

いつさい

みみ

もの

聞

眼と耳とをくじりて、一切の眼をあけ、一切の耳に物をき

ほど

くどく

たれ

ひと

くどく

かせんは、いか程の功德かあるべき。誰の人かこの功德を

はか ば計るべき。たとい父母、子をうみて眼・耳有りとも、物

をし し 畜生の眼・耳にてこそあらましか。

にほん いっさいしゅじょう じつぼう なか さいほう いっぼう いっさい ほとけ
日本の一切衆生は、十方の中には西方の一方、一切の仏

なか あみだぶつ いっさい ぎよう なか みだ みようごう みつ
の中には阿弥陀仏、一切の行の中には弥陀の名号、この三

ほん よぎよう か ひと いっごう ひと
つを本として余行をば兼ねたる人もあり、一向なる人もあ

それがし い けんちようごねん いま いた にじゅうよねん
りしに、某、去ぬる建長五年より今に至るまで二十余年

あいだ とお いちだいしようぎよう しょうれつ せんご せんじん た ちか
の間、遠くは一代聖教の勝劣・先後・浅深を立て、近く

みだねんぶつ ほけきよう だいもく こうげ た もう かみ
は弥陀念仏と法華経の題目との高下を立て申すほどに、上

いちにん しもばんみん いた もち
一人より下万民に至るまで、このことを用いず。あるいは

ししと

しゅじゅ うった

ほうばい 語

師々に問い、あるいは主々に訴え、あるいは傍輩にかたり、

わ み さいし けんぞく もう

くにぐに こおりこおり

あるいは我が身は妻子・眷属に申すほどに、国々・郡々・

ごうごう むらむら てらでら やしろやしろ さた

ひと にちれん

郷々・村々・寺々・社々に沙汰あるほどに、人ごとに日蓮

な し ほけきよう ねんぶつ たい

ねんぶつ よう

が名を知り、法華経を念仏に對して念仏のいみじき様、

ほけきようかな しよにん

よう にちれん 悪 よう

法華経叶いがたきこと、諸人のいみじき様、日蓮わろき様を

もう かみ 怨 しも にく

にほん いちどう ほけきよう

申すほどに、上もあだみ下も悪む。日本一同に法華経と

ぎようじや だいおんてき

行者との大怨敵となりぬ。

もう にほんこく ひとびと

にちれん かた なか もの

こう申せば、日本国の人々ならびに日蓮が方の中にも物

覚 もの ひと しん

におぼえぬ者は、「人に信ぜられんと、あらぬことを云う」

おも

ぶつぼう

どうり

しん

なんによ

し

と思えり。これは、仏法の道理を信じたる男女に知らせん

料

もう

おのおの

こころ

任

たも

りように申す。各々の心にまかせ給うべし。

みようしようごんのうほん

もう

こと

によにん

おん

もち

妙莊嚴王品と申すは、殊に女人の御ために用いること

め

おとこ

ほん

まつだい

およ

にようぼう

なり。妻が夫をすすめたる品なり。末代に及んでも、女房

おとこ

な

変

くどく

の男をすすめんは、名こそかわりたりとも功德はただ

じようとかくぶにん

浄徳夫人のごとし。

況

にようぼう

おとこ

とも

ごしんよう

とり

ふた

いおうや、これは女房も男も共に御信用あり。鳥の二つ

はね

具

くるま

ふた

わ掛

なにごと

じよう

の羽そなわり、車の二つの輪かかれり。何事が成ぜざる

てん

ち

ひ

つき

ひ照

あめ降

くどく

べき。天あり地あり、日あり月あり、日てり雨ふる、功德の

そうもくはな咲 みる

草木花さき菓なるべし。

つぎ かんぼつぽん もう しやかぶつ みでし なか そう 数 多

次に勧発品と申すは、釈迦仏の御弟子の中に僧はあまた

かしよう あなん そう おう そう しん

ありしかども、迦葉・阿難、左右におわしき。王の左右の臣

しょうじようきよう ほとけ ふげん もんじゆ もう

のごとし。これは小乗経の仏なり。また普賢・文殊と申

いっさい ぼさつ おお きようしゆしやくそん そう しん

すは、一切の菩薩多しといえども、教主釈尊の左右の臣な

り。

いちだいしようか ほけきようはちかねん あいだ じつぽう もろもろ

しかるに、一代超過の法華経八箇年が間、十方の諸の

ぶつぼさつとう だいちみじん おお あつ そうち そう しん

仏菩薩等、大地微塵よりも多く集まり候いしに、左右の臣

ふげんぼさつ ふしぎ

たる普賢菩薩のおわせざりしは不思議なりしことなり。し

かれども、妙莊嚴王品をとかれて、さておわりぬべかり

とうほうほういとくじようおうぶつ

くに

まんおく

ぎがく

そう

むすう

しに、東方宝威徳浄王仏の国より万億の伎楽を奏し、無数

はちぶしゅ

いんそつ

遅

馳

まい

たま

の八部衆を引率して、おくればせして参らせ給いしかば、

ほとけ

ご

氣

色

悪

おも

ゆえ

いろ変

仏の御きそくやあしからんずらんと思ひし故にや、色かえ

まつだい

ほけきよう

ぎようじゃ

しゅご

様

懇

もう

て末代に法華經の行者を守護すべきようをねんごろに申

あ

ほとけ

ほけきよう

えんぶ

るふ

し上げられしかば、仏も、法華經を閻浮に流布せんこと

殊

懇

もう

愛

たま

かえ

ことにねんごろなるべきと申すにや、めでさせ給いけん、返

かみ

じようい

殊

懇

ほとけ讃

たま

つて上の上位よりも、ことにねんごろに仏ほめさせ給えり。

ほけきよう

まつだい

によにん

にじゅうはつぽん

ほんぽん

くよう

かかる法華經を、末代の女人、二十八品を品々ごとに供養

思

へん

せばやとおぼしめす。ただ事にはあらず。

ほうとうほん

おんとき

たほうによらい

しやかによらい

じつぼう

しよぶつ

いっさい

宝塔品の御時は、多宝如来・釈迦如来・十方の諸仏、一切

ぼさつ 集

たま

ほうとうほん

の菩薩あつまらせ給いぬ。この宝塔品はいずれのところ

ただいま

勘

そうら

にちによござん

おんむね

か只今ましますらんとかんがえ候えば、日女御前の御胸の

あいだ

はちよう

しんれんげ

うち

にちれん

み

間、八葉の心蓮華の内におわしますと日蓮は見まいらせて

そうろう

候。

れい

はちす

れんげ

あ

きさき

おんはら

たいし

例せば、蓮のみに蓮華の有るがごとく、後の御腹に太子

かいにん

じゅうぜん

たも

ひと

たいし

う

を懷妊せるがごとし。十善を持てる人、太子と生まれんと

きさき

おんはら

しよてん

しゅご

ゆえ

たいし

して後の御腹にましますせば、諸天これを守護す。故に、太子

をば天子と号す。法華經二十八品の文字六万九千

さんびやくはちじゅうしじ いちいち もんじ たいし

三百八十四字、一々の文字は、字ごとに太子のごとし、字ご

ほとけ ごしゆし

とに仏の御種子なり。

やみ なか かげ ひと 見 こくう とり と あと

闇の中に影あり。人これをみず。虚空に鳥の飛ぶ跡あり。

ひと たいかい うお みち ひと つき なか

人これをみず。大海に魚の道あり。人これをみず。月の中に

してんげ ひと ものひと ひと

四天下の人・物一つもかけず。人これをみず。しかりとい

てんげん にちによごぜん おんみ ないしん ほうとうほん

えども、天眼はこれを見る。日女御前の御身の内心に宝塔品

ぼんぷ み しゃか たほう じつぼう しょうぶつ

まします。凡夫は見ずといえども、釈迦・多宝・十方の諸仏

ご 覧 にちれん 推 尊

は御らんあり。日蓮またこれをすいす。あらとうとし、と

うとし。

しゅう

ぶんおう

お

もの

養

戦

か

周の文王は老いたる者をやしないていくさに勝ち、その

すえさんじゅうしちだいはつびやくねん

あいだ

末

々

僻

ごと

末三十七代八百年の間、すえずえにはひが事ありしかど

こんぽん

く

榮

たも

あじやせおう

だいくにん

も、根本の功によりてさかえさせ給う。阿闍世王は大悪人た

ちち

頻

婆

娑

羅おう

ほとけ

すうねん

養

りしかども、父・びんばさら王の仏を数年やしないまいら

ゆえ

くじゅうねん

あいだくらい

たも

たま

とうせい

せし故に、九十年の間位を持ち給いき。当世もまたかく

ほけきよう

おん

敵

な

そうろうよ

しゆゆ

のごとく、法華経の御かたきに成りて候代なれば、須臾も

たも

見

こごんだいぶどの

むさしのぜんじにゆうどうどの

持つべしとはみえねども、故権大夫殿・武蔵前司入道殿の

おん

政

あんのん

しじゅう

御まつりごとといみじくて、しばらく安穩なるか。それも始終

ほけきよう かたき な かな
は法華經の敵と成りなば叶うまじきにや。

ひとびと へびやくあん ねんぶつしやとう ほけきよう 知音
この人々の御僻案には、「念仏者等は法華經にちいんなり。

にちれん ねんぶつ かたき われ しん うんぬん
日蓮は念仏の敵なり。我らはいずれをも信じたり」と云々。

にちれん 詰 い よ たいか いにしえ 過
日蓮つめて云わく、「代に大禍なくば、古にすぎたる

えきびよう ききん だいひようらん め けつ ほけきよう
疫病・飢饉・大兵乱はいかに。召しも決せずして法華經の

ぎようじや にど たいか おこな ふびん ふびん
行者を二度まで大科に行いしはいかに、不便、不便」。

によにん おんみ ほけきよう おんいのち 続 たも
しかるに、女人の御身として法華經の御命をつがせ給う

しやか たほう じつぼう しよぶつ おんふぼ おんいのち たも
は、釈迦・多宝・十方の諸仏の御父母の御命をつがせ給う

くどく ひと いちえんぶだい うち あ
なり。この功德をもてる人、一閻浮提の内に有るべしや。

きようきようきんげん

恐々謹言。

ろくがつにじゅうごにち

六月二十五日

にちによごぜん

日女御前

にちれん

日蓮

かおう

花押